The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ジャイナ教徒の大家族とくらして
Author(s)	長崎, 広子
Citation	アジア・アフリカ言語文化研究所通信. 2002, 104, p. 11-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/26958
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

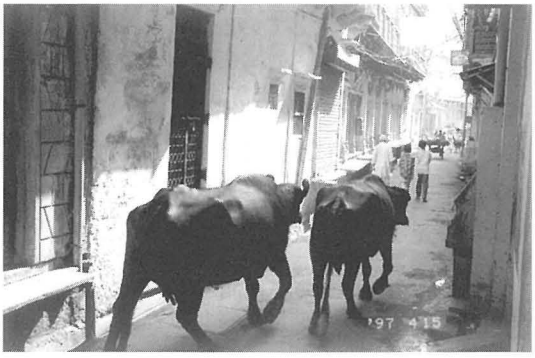
ジャイナ教徒の大家族とくらして

長崎　広子*

はじめに

インドの宗教ジャイナ教は，仏教の開祖ゴータマ・ブッダと同時期に活躍したマハーヴィーラ（前 6～前 5 世紀）を開祖と仰ぎ，不殺生と苦行と禁欲を通すことで知られる。生活の中では，正しい信仰，正しい知識，正しい行いの三つの宝（トリ・ラトナ）が重んじられ，修行の上では不殺生，うそをつかないこと，盗みを犯さないこと，性的行為を行わないこと，無所有の五つの誓戒が定められている。在家信者であってもできる限り出家に近づくように努める。あらゆるものに生命を見出し，不殺生の誓戒を破らぬように細心の注意を払うため，食生活においては肉や卵はもちろんのこと殺生を犯す危険性のあるもの（根菜類や蜂蜜など）も厳格な信者は口にしない。インドの人口に占めるジャイナ教徒の割合は 5 パーセントと少ないにもかかわらず，多くが商業に携わる富裕な人々でインド経済において大きな力をもっている。

縁あって，私はインド留学中の約二年間ジャイナ教徒の家に居候することになった。その後も毎年訪れるうちに，この一家とは 5 年あまりのつきあいになり，今では大家族の一員と認められるようになった。最初は食事や生活習慣の違いに戸惑うことばかりであったが，ジャイナの教えを基盤とする生活にしだいに慣れ，最後は快適に感じるようになった。その暮らしの中の些細なことを書きとめるうちに，興味深い情報が含まれていることに気づき，今回は女性のくらしを中心にご家族の同意を得て紹介させていただくことにする。



モーティー・カトラーの町並

ジャインさん一家

私がお世話になった一家は，タージ・マハルで知られる北インドの観光都市アーグラーで代々宝石商を営む大家族である。住まいは無数の商店が建ち並ぶバーザールの一画モーティー・カトラーの路地裏にあり，この場所は古くからジャイナ教徒が暮らすことで知られている。「モーティー・カトラー」の名はムガル第三代皇帝アクバルの時代（1542－1605）に書かれたジャイナ商人の自伝『バナーラシーダーサ半生記抄』[1]に登場し，一家が暮らすレンガ作りの家もアクバル帝の時代のものである。

インドでも高度経済成長のめざましい都市部では核家族化がすすんでいるが，伝統的な家族の形態は大家族である。この一家では男子は結婚しても分家せずに同居するので，おじいさんとその三人の息子の家族が共にくらしている。長男を中心とする家父長制で，隠居したおじいさんに代わり，長男のアショークさんが商売だけでなく，全ての

* 日本学術振興会特別研究員

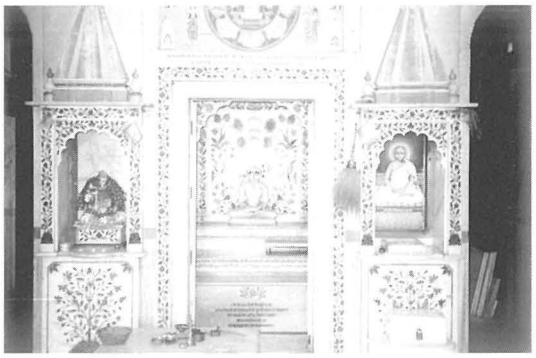
決定権を握っている。おばあさんが亡くなっているので，女性の中ではアショークさんの妻マドゥーさんがすべてを取り仕切る。

アショークとマドゥー（主婦）夫妻には娘シルピー（大学生）さんがおり，次男パヴァンとヴィニーター（主婦）夫妻には娘ニミーシャー（小学5年生）と息子ハルシュル（小学2年生）がいるが，三男スニールとスマン（主婦）夫妻に子供はいない。アショーク，パヴァン，スニールの三兄弟は大学卒業後家業を継ぎ，従業員を二人使って二軒の宝石店を経営している。ちなみに，嫁いだ五人の姉妹の中でスシーラーとシャシおばさんの家族がアーグラーの新興住宅街に向かいあって暮らしており，頻繁に家を訪れて親しく付き合っている。三兄弟にスシーラーおばさんの夫ギャーンさんとシャシおばさんの夫ニルマルさんを含めた五人で「パンチャラタン（五つの宝石）」という名の小さなホテルを共同経営している。

信仰

ジャイナ教には白衣派と空衣派の二つの宗派があるが，一家は白衣派の中でも寺院にお参りして偶像を崇拝するマンディルマーギー派に属する。ジャイナ教徒の中には「ジャイン」という姓を名乗る人が多いが，ヒンドゥー教のようにジャイナ教にもカーストがある。ただし，ジャイナのカーストは身分を規定するものではなく，名前の一部として「うちは何々です」という程度のものでカースト間では通婚可能な場合が多い[2]。ちなみに

バイロー・ジー



ジャイン家のお寺　中央はマハーヴィーラ像

この一家のカーストは，ラージャスターン州のオース地方に由来する「オースワル」である。

一家の信仰の中心はアショークさんのおじいさんが建てたという20坪ほどの小さなジャイナの寺で，住まいに隣接した路地にあり，一般にも開放している。大理石を敷き詰めた内部には，中央に開祖マハーヴィーラの像が祀られているが，非常に不思議なことに，脇にヒンドゥー教の神バイロー・ジー（シヴァ神の別名）も祀られている。寺の賽銭をおじいさんが管理し，毎朝アショークさんは白い着物に口にマスクをつけて僧侶のようにお勤めをする。白檀をすったり，神像をきれいに拭くといったお寺の雑用一般は，近所に住むヒンドゥー教徒のバラモン女性が毎朝やってきて行う。家族の者は朝ここでお参りをして一日をスタートさせる。約10分程度のお参りでは，まず線香をたいて体の前でぐるぐる回しながらマハーヴィーラ像の周囲を三回まわり，米粒を神像の前に一握りおいて卍と三日月と三叉の矛を右手で描く。お賽銭を入れて，熱心な人はジャイナのお経を読み，最後に白檀で額に印（ティラク）をつける。

住居の奥にも小さな神棚があり，家の女神（名前は不明）と小さな額に入ったマハーヴィーラの絵が祀られている。一年に二回ディーワーリー（10月から11月ごろ）とホーリーの祭り（2月から3月ごろ）に先立って，居間の壁が塗り直されるが，期間中女神が居間に移動させられ，終わると家族の者で一時間あまりの礼拝をして，元の場所に戻される。女神がいる間は，口をゆすがな

いと居間を通ることはできない。冷蔵庫の上にはヒンドゥー教の神ガネーシャとサラスヴァティー女神の像があり，一年に一回ディーワーリーの祭りの時に新しいものに取り替えられるが，これらは礼拝の対象ではない。

大きな祭りの時には，車で 20 分程度の距離にあるジャイナの聖者廟「ダーダーワリー」に団子を供えてお参りする。ここでは，同じ宗派の人々が集まって世間話や縁談の情報を交換し，お寺というよりも社交場のようである。

また，年に数回ラージャスターン州のジョードプルにあるナーコーラー・ジーという聖地に巡礼に行く。願掛けをして，それが叶うとお礼参りをし，さらに次の願掛けをするので，途切れることなく巡礼に行かなければならない。ご利益があるという噂が広まり，最近では宗派の人々がバスを仕立てて巡礼するようになった。

なお，ジャイナ教徒はヒンドゥー教徒と親しい関係にあり，特に女性達は近所のヒンドゥー教徒との付き合いを大切にする。ヒンドゥー教の寺院にお参りしたり，祭りに参加することもある。ちなみに，インドでは異宗教間の結婚は好まれないが，マドゥーさんの甥は大学で知り合ったヒンドゥー女性と恋愛結婚しており，この意味でもこの一家とヒンドゥー教徒との関係が友好的なものであることが伺える。

家族の中の力関係

大家族の生活に触れて疑問に思う点は，家族の中での力関係である。お互いの呼び方からある程度その関係を説明できるのではないかと考え，表を作ってみた。この表は，縦列から横列に対する呼ぶ方を示している。●は呼び捨て，○は名前や親族名称などはっきりとした言い方をせずに「おーい」などと声をかけること，下線は親族名称を指す。★印は直接呼びかけることを好まない関係に付した。

呼び捨てにできる人数が多いほど家族の中での

プージャーを行なうバーバー・ジー（おじいさん）

立場が上になり，おじいさんが最も上にいることが分かる。次に，三人の息子の中では長男のアショークさんが最も上で，男の兄弟は「バーイー（兄弟）」とよばれるが，彼だけは「バーイー」につづいて「旦那」あるいは「家長」を意味するアラビア系の語である「サーブ」をつけてよばれる。お嫁さんの地位は配偶者の順番に従って決まる。兄嫁の場合は「バービー（兄嫁）」に「ジー」をつけて呼ぶ。「ジー」は名前や親族名称のあとに付けて「～さん」の意味を表す。弟の嫁の場合は呼び捨てにできるが，遠慮してあまり呼びかけることはない。遠慮という点では，嫁いできた女性たちも夫の兄に直接呼びかけることを避けようとする。遠くから呼ぶ時は，まず子供に声をかけて，子供から呼んでもらうようにする。夫婦の間で夫が妻を呼び捨てにするのは若い世代で，ふつうは気恥ずかしいので「おい」と呼びかけるだけである。妻から夫によびかける時は「アープ（あなた）」という。

子供たちの間では，年上の兄や姉を親族名称で呼ぶ。ハルシュルは姉のニミーシャーを名前に「ジージー（お姉ちゃん）」をつけてよぶ。年下に対する場合，つまり姉のニミーシャーは弟のハルシュルを呼び捨てにする。だが，「いとこ」という親族名称はなく，みな兄弟姉妹と呼ばれる。この家族の中ではシルピーさんはニミーシャーとハルシュルの従姉にあたるが，二人は彼女を「シルピー・ジージー（シルピーお姉ちゃん）」とよんでいた。

	ラージェンドラシン	アショーク	マドゥー	シルビー	パヴァン	ヴィニーター	ニミーシャー	ハルシュル	スニール	スマン
ラージェンドラシン		●	○	●	●	○	●	●	●	○
アショーク	バーバー・ジー（おじいさん）		○	●	●	★	●	●	●	★
マドゥー	バーバー・ジー（おじいさん）	アーブ（あなた）		●	パヴァン・バーイー	●	●	●	スニール・バーイー	●
シルビー	バーバー・ジー（おじいさん）	パーパー（お父さん）	マッミー（お母さん）		パヴァン・チャーチャー（パヴァン叔父さん）	ヴィニーター・チャーチー（ヴィニーターおばさん）	●	●	スニール・チャーチャー（スニール叔父さん）	チャーチー（おばさん）
パヴァン	バーバー・ジー（おじいさん）	アショーク・バーイー・サーブ（アショークお兄さん）	バービー・ジー（兄嫁さん）	●		●	●	●	●	★
ヴィニーター	バーバー・ジー（おじいさん）	アショーク・バーイー・サーブ（アショークお兄さん）★	バービー・ジー（兄嫁さん）	シルビー・ジー（シルビーさん）	アーブ（あなた）		●	●	スニール・バーイー（スニール兄弟）	●
ニミーシャー	バーバー・ジー（おじいさん）	タウ・ジー（伯父さん）	タイ・ジー（おばさん）	シルビー・ジージー（シルビーお姉ちゃん）	パーパー（お父さん）	マッミー（お母さん）		●	チャーチャー（叔父さん）	チャーチー（おばさん）
ハルシュル	バーバー・ジー（おじいさん）	タウ・ジー（伯父さん）	タイ・ジー（おばさん）	シルビージージー（シルビーお姉ちゃん）	パーパー（お父さん）	マッミー（お母さん）	ニミーシャー・ジージー（ニミーシャーお姉ちゃん）		チャーチャー（おじさん）	チャーチー（おばさん）
スニール	バーバー・ジー（おじいさん）	アショーク・バーイー・サーブ（アショークお兄さん）	バービー・ジー（兄嫁さん）	●	パヴァン・バーイー（パヴァン兄弟）	バービー・ジー（兄嫁さん）	●	●		●
スマン	バーバー・ジー（おじいさん）	アショーク・バーイー・サーブ（アショークお兄さん）★	バービー・ジー（兄嫁さん）	シルビー・ジー（シルビーさん）	パヴァン・バーイー（パヴァン兄弟），★	バービー・ジー（兄嫁さん）	●	●	アーブ（あなた）	

おじに呼びかける場合は，父親の兄（タウ）と弟（チャーチャー）を区別して呼ぶ。シルピーさんには父の弟にあたる二人のおじ（チャーチャー）がいるので，「チャーチャー」の前に名前を付けて二人を区別していた。ヴィニーターとスマンの二人のお嫁さんはシルピーさんのおばにあたるが，父の弟の配偶者なので，二人よりもシルピーさんの立場が上になる。二人に呼びかけるときは名前に続けて「チャーチー（おばさん）」といい，二人はシルピーさんを呼び捨てではなく名前に「ジー（さん）」をつけてよぶ。父の兄嫁の場合は「タイ・ジー（おばさん）」とよび，逆におばから甥や姪を呼び捨てにすることができる。

このように，呼び方からみると家族の関係ははっきりしているが，実際は他にもその人の立場を決める要素はある。たとえば，いとこ同士の関係が兄弟姉妹と同等であっても，ハルシュルはこの家でたった一人の跡取りの男子なので大事にされている。そのため，ヴィニーターさんは二番目の嫁であるが，後継ぎの母ということでかなり立場が強い。なお，ハルシュルの教育は父親よりも伯父のアショークさんが中心になって行っていた。一方，スマンさんは一番下の嫁として立場が弱い上に子供がいないので肩身の狭い思いをしている。

ちなみに，私はアショークさんとマドゥーさんの娘でシルピーさんの姉という位置付けだが，子供たちが「ディーディー（お姉さん）」と呼ぶうちに，家族全員が同じように呼ぶようになった。私から呼びかける時は，シルピーさんの例にならって，目上の人たちを親族名称でよび，子供たちは呼び捨てにした。ただ，アショークさんとマドゥーさんには遠慮があるので，他人が呼びかけるように「アショーク・ジー（アショークさん）」または「アショーク・バーイー・サーブ（アショーク旦那）」，「バービー・ジー（兄嫁さん）」と呼んだ。

なお，この一家で使われている家族間の呼び方は，ヒンドゥー教徒の一般家庭と同じで，ジャイナ教徒として特に異なる点がないことを付け加えておく。

食事

ジャイナ教徒の暮らしの中で最も特徴があるのは，厳しい菜食主義を守る食生活である。私が菜食主義者でないことを皆知っているので，尋ねて来た人たちは何を食べさせているのかとお嫁さんによく質問した。すると「ディーディー（お姉さん）は辛いものはだめだけど，私達と全く同じものを食べているのよ」と得意げに答えていた。

一日の時間の流れの中で食事の様子を説明すると，次のようになる。

7 時半ごろに「おめざ」のモーニングティーを全員で取るが，ここではチャーイ（ミルクティー）と卵抜きのビスケットとスパイシーなスナック菓子が出される。その後全員が順番に行水して，家の掃除と洗濯を済ませて 10 時半ごろに朝食がわりの軽食を取る。内容はトーストやサンドイッチ，揚げパン，ポエ（カレー味の炒飯のようなもの）などが日替わりで作られる。

男性が店に出かけると，女性は昼食の準備にかかる。子供たちが 12 時ごろに下校し，2 時半ごろに昼食をとる。ハルシュルとニミーシャーはノンベジタリアンの多いキリスト教の私立学校に通っているので，朝食の弁当を持参する。

ところで，インドの食事といえばカレーを思い浮かべるが，特にカレーとよぶ料理はなく，家庭では全てのおかずが香辛料で味付けされている。この地方では米もほとんど食べない。この家の一般的な食事の内容は，スパイスたっぷりの炒めた野菜，汁っぽい野菜，ダールという豆のスープに主食のパンである。全粒粉のパンは，作り方によってフルカー，プーリー，ローティーなどといわれる。これにお菓子をくわえて全てひとつの皿に盛られ，別の皿に生野菜のサラダが出る。米はあまり食べないが，たまにご飯を炊いてダールといっしょに食べる。つけもの，ヨーグルト，青唐辛

食事の様子

子，チャトニーというソースは好みで添え，食事の最後にパーパルという煎餅を焼いて食べる。男性の昼食は家から店に弁当を届ける。

昼食後は昼寝をして，起きるとお茶を飲む。

夕食も昼と同じような内容で8時半から9時ごろに食べる。

さて，ジャイナの教えによれば根菜類は全て禁止のはずであるが，ジャガイモはひんぱんに食事に使われており，問題はないようである。玉ねぎ，人参，大根は切ってサラダとして別の皿に出されるが，調理されることはないので，完全に許された野菜とはいえない。そのため，このサラダはおじいさんには出されることはなく，特に玉ねぎに関しては若い者の中でも好んで食べるのはシルピーさんだけであった。生姜はお茶といっしょに煮出して飲むことはあるが，食事には使われない。ニンニクは全く食べず，根菜類でないけれどもナスは食べない。

逆に，好まれる野菜はオクラ，グリーンピース，トマト，カリフラワー，きゅうり，ジャガイモ，菜っ葉類などである。野菜以外ではパニールというインドのチーズがあり，料理に加えると，お肉が入っているような贅沢な感じがする。なお，パルユシャンの祭りの8日間は緑黄色野菜を食べない。

ところで，よく知られているようにインドでは右手で食事をするが，最近では汁っぽい料理には小さなスプーンを使う。だが，この家で何よりも驚いたことは，全ての人がひとつの皿で食べるという極めて古い習慣を続けていることである。スチールの大きな丸い皿（ターリー）の真中にパンやご飯が盛られ，周りにおかずを入れた一人用の小さなスチールの小鉢が並べられる。日本のお膳のような低い台（チャオキー）を地べたに置いて，その上に皿をのせ，全員がぐるりと囲んで座る。パンは必要な分をちぎって取り，おかずと一緒に食べる。極めつけはご飯の食べ方で，皿の真中にどっさりとご飯をのせて豆のスープをかけ，一番目上の人（アショークさんかマドゥーさん）が代表して右手でよくかき混ぜて，そこから全員が手で直接取って食べる。たとえ風邪をひいていてもお構いなしで，ご飯とスープをよく混ぜて餅状になるまで捏ね上げるのだ。ジャイナ教徒でもこの習慣を続けている家庭は少ない。

だが，この食事の輪の中におじいさんが加わることはない。他の人より先にテーブルで食べ，特に夕飯はかなり早くに済ませる。これは夜になると電気の光で寄ってきた虫が食事に入る可能性があるという教えを守っているからである。

寝る前には全員が牛乳を飲んで休む。

以上がふだんの一日の食事の様子である。我々から見ればさまざまな制約のある食生活であるが，本人たちは生まれた時から習慣としているので不自由を感じている様子はない。野菜ばかりで物足りないかといえば，ふんだんにスパイスとバターを使うことで口寂しさは紛らわさており，たんぱく質は豆から取るので栄養のバランスもよい。さらに，季節の果物，木の実，ドライフルーツ，甘いインドのお菓子はとてもおいしくて，ベジタリアンの食事のバラエティーの豊かさには驚かされる。

なお，嗜好品の中では酒や煙草が禁止で，代わりにパーンというキンマの葉を食後にかむことがある。

大家族の女性たち

私がはじめて家を訪れた時から，年齢が近いと

いうことで，大学生のシルピーさんは私の面倒を見るように言いつけられた。彼女はこまごまと世話を焼き，どこに行くにも一緒について来てくれた。先生の家に勉強に行く時もいっしょに来て，終わるまでじっと座って何時間でも待っていてくれる。私に構うばかりで彼女自身が大学に行かないので，申し訳ないと思っていると，実はふだんも大学に通っていないことが分かった。理由は年頃なので変な虫がついては困るというもので，定期試験の前になると女性だけが通う塾で試験勉強をして，単位だけは取っていた。彼女の毎日は家事を手伝い，好きな手芸をして，あいた時間はテレビで甘い恋愛映画を見てすごすというものだった。服や化粧品を買いにバーザールに行くことを楽しみにしているが，一人で外出することは許されないので，必ず誰か家族の者と一緒に出かける。幼馴染のヒンドゥー教徒の友人が二人いるが，一緒に出かけたりはせず，電話で話したり，たまに互いの家を訪問するというものだ。そんな中でシルピーさんがもっとも楽しみにしているのは親戚とのつきあいであった。近所に住む従兄弟のアシーシュはしょっちゅう来ては話しこみ，仲のよい二人の姿は恋人同士のような印象を与えるほどであった。知り合いの結婚式があると彼女は張り切っておしゃれをして，久しぶりに会う親戚との会話に夢中になる。どんなに甘えても，どんなにはしゃいでも許されるのは唯一親戚との付き合いというわけだ。

一方，お嫁さんたちの外出はかなり自由で，一人でバーザールに買い物に出かけたり，近所の宗派の人に会いに行ったりということは構わない。実家に帰ることも自由で，一ヶ月以上帰ってこないということもある。服装は，結婚前の女性がパンジャービードレス（ズボンの上にワンピースとスカーフ）に小さな装身具という質素なもので，お嫁さんたちは優雅なサリーを身にまとい，高価な宝石をつける。だがこれも，いったん夫が亡くなれば全ての装身具をはずして白いサリーを着ることしか許されず，豪華に着飾ることは幸せな結婚生活を送る女性の証なのである。

皿洗いに来ているラージクマーリーさん

自由があるといってもお嫁さんたちの毎日は家事と子育てに追われ，大変な忙しさである。この家では，食事はひとつの台所で三人のお嫁さんが協力して作るが，洗濯はそれぞれの家族にひとつずつ洗濯機があり，洗濯夫（ドービー）に出さずに自分たちで洗う。大家族でも他の家族の服を洗うことはない。部屋は家族ごとにひとつづつあり，それぞれが自分たちの部屋を掃除し，共同の居間の清掃は手があいた者が行う。

だが，一日に二回近所の女性が来て皿を洗い，アイロンがけも近所のアイロン屋に出す点では楽ができる。また，女性は食事の材料を買いに行くことはなく，パヴァンとスニールおじさんが毎朝袋をさげて買い物に行く。

ヒンドゥー教徒の間にみられるパルダー制（女性隔離の慣習に由来する）は，既婚女性が男性の前でサリーの裾で顔を隠すものであるが，この家でもこの習慣が見られる。家族の間では，おじいさんや男性の前で，客が訪れた時には眉の位置までサリーの裾で頭を覆い，外出時には常に頭を覆って出かける。

また，生理中の女性は不浄とされるため，三日間外出できず，食事も別の皿で取る。敷物の上に座ることはなく，物に触れることができないので人に取ってもらい，ベッドに寝ないで地べたに布団を敷いて寝る。

これらの習慣を女性差別ととるか女性を守るた

めのものととるかは意見の分かれるところであろうが，この家で女性が大切にされていることは事実である。よい夫に恵まれ，でっぷりと太って幸せそうな女性を見ると，仕事に追われる男性よりも女性として生きるのも悪くはないと思うことがあった。

結語

以上は主に 1996 年から 1998 年にかけての記録である。その後も毎年訪れるたびに，この家族に訪れた変化を見てきた。99 年にシルピーさんはインドでは一般的な親同士が決める見合い結婚をした。相手の男性ヴィヴェークさんは商業都市ボンベイでダイヤモンドを扱うジャイナ教徒である。彼のご両親が首都デリーに住んでいたので，新婚夫婦は二人だけでアパートに暮らし，昨年には男の子が誕生した。一家に新しい家族が増える一方で，ヴィヴェークさんのお父さんが亡くなり，未亡人となったお母さんはデリーを引き払い，現在はボンベイで一家と同居している。

今年アーグラーに行くと，驚くニュースがあった。子供のいないことを苦にしていたスマンさんが妊娠していたのだ。5 月に出産予定なので，これで冗談にも離婚したいとは言わなくなるだろう。

シルピーさんの結婚式にて　両親とシルピーさん

だが，今まではハルシュルだけが後継ぎだったので，もしも男の子が生まれると二番目のお嫁さんとの関係はどうなるのだろうか，などとおせっかいなことまで考えてしまった。

たまたま大家族に居候して，女であったことで年頃の娘さんや留守を守る奥さんたちの暮らしを垣間見ることができた。その暮らしの一端でも紹介できたとすれば幸いである。文化人類学の知識を持ち合わせていないため，見落としたり見誤ったりした点はお許し願いたい。たくさんの不思議な出来事があったが，また別の機会にゆずらせていただく。

---

[1] 古賀勝郎『Ardha Kathanaka(Ardha Katha): Tippani バナーラシーダーサ半生記抄（訳注）』，大阪外国語大学学報 第 24 号，第 27 号

[2] ジャイナの一部のカースト間では身分の上下や通婚の規定がある。Sangave, Vilas Aninath. *Jaina Community : A Social Survey*, Bombay: Popular Prakashan, 1959